

5年遅れて医学部へ

大学受験の時には、社会に出てからどのように生きていくべきか、進路を決めなければならぬ。しかし、私は自分の具体的な将来像をまだ思い描くことができないでいた。

長兄は医師になり、次兄は父の薬局を継ぐために薬剤師になった。両親は私も長兄と同様に医学の道に進ませたいと考えていた。

ところが、当時の私の頭の中にあつた病院のイメージは、ホルマリンの匂いがする薄暗い所というものであり、そんな陰気な所で働きたくはないという単純な理由から、医学部は受験しなかつた。

そんな私が選んだのは、名古屋大学工学部航空学科だった。将来パイロットになりたいとか、飛行機を造りたい

名古屋第二赤十字病院名誉院長
愛知医療学院短期大学学長

石川 清 6



重症心身障害児医療に人生を捧げた兄（右端）

感謝される兄の姿に心動かされ

というような夢があつたわけではなく、明るい雰囲気だし、人数も少なく、ただおもしろそうと感じたに過ぎなかつた。

工学部へ行くという私の選択は、両親の思い通りではなかつたが、反対はしなかつた。

学生生活は、どちらかと言えばラグビー一筋で、授業にはあまり真面目に出席せず、友人のレポートを借りたりして、卒業するための単位だけを取つていた。

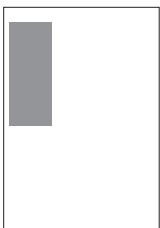
こうして大学生としての4年間で終わり、1970(昭和45)年に卒業し、皆と同じように大学院へ進んだが、将来何になるのかという気持ちはやはり固まつていなかつた。

いよいよ就職する段になって、就職活動で航空機関連の大企業を訪問して思ったのは、大きな組織の歯車のひとつになって働くことは、自分の「人生のやりがい」にはどうしてもなりえない、ということだつた。

そんな頃、私は長兄が勤務している帝王病院を訪れた。そこで、兄が重症心身障害児医療に人生を捧げ、患者さんや家族から頼りにされ、感謝されている姿を見て感動し、医者になることを決意した。

当時、自分の生活費は数人の高校生の家庭教師をやつて稼いでいたので、高校生に教えていたことが、自分自身の受験勉強になった。

1971(昭和46)年、大学院を1年で中退し、名古屋大学医学部へ入り直した。人より5年遅れであつたが、そのおかげで11年間、大学でのラグビー生活を存分に楽しむことができた。



障害児医療一筋

私と長兄とは9歳違いで、私が小学校3年の時、兄は金沢の大学に入ったため、ほとんど一緒に過ごした記憶はない。しかし、いろいろな点で兄の影響を受けていた。私がラグビーを始めたのも、医者になる道を選んだのも、やはり兄の影響だった。

兄は生来、無口な性格で、どちらかと言うと偏屈者、変わり者と思われ、人と関わることが苦手だった。小児科を専攻し、大学卒業後、教授から言われた赴任先は、誰も行きたがらない重症心身障害児施設（医王園、後の医王病院）だった。

しかし、兄はそれを不服とせず、障害児医療に取り組み、その後、一度も異動することなく定年まで勤めること

長学学
院大
名譽短
十字期
病院
第二学
赤十字
第二学
屋敷
古知
名愛
長学学



石川 清 7



人に何を言われようと自らの信念を貫いた兄

になった。

当時、障害児は「座敷牢」と呼ばれる家の中の人目に触れない所で養育される、微笑みと喜びを与えてくれる存在

兄が貫き通した信念

れる状況だった。兄にとって障害児は、

何も話さなくても自然体で向き合え

る、微笑みと喜びを与えてくれる存在

！と声をかけていた。子どもたちは毎日、兄の来るのを待っていた。

そんな兄は障害児親子に慕われ、感謝され、やりがいを持って仕事をして

いた。私が医者になるのを決めたのは、そんな兄の姿を見てのことだった。

兄はクリスマスチャンで、学生の時に洗礼を受け、教会を愛し、聖書と祈りで

心の安らぎを得ていた。自分の仕事に

ついて「障害児に仕えることが僕の伝

道だ」と語っていた。

誰もやりたがらない仕事でも、長年

続けていれば周りから次第に評価され

るようになり、大学からも認められ、

金沢大学の臨床教授や北陸小児科学会

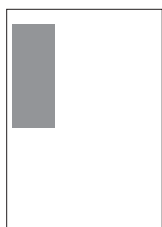
の会長も頼まれていた。

晩年には、望んだこともない院長を

拝命され、苦手な役職も天命と信じて

重責を担っていた。

障害児に一人の人間として向き合
い、毎朝始業前に40分ほどかけて、全
病棟の子ども一人ひとりに「おはよう



兄の死

兄の勤める帝王病院も若い医師が増えるに従って、鼻の管から流動食を入れる鼻腔栄養が行われるようになった。これについて、兄はある信念を持っていた。

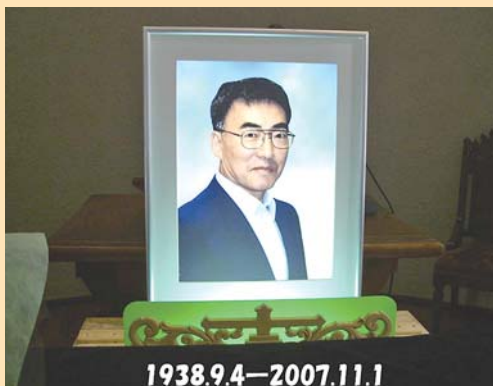
「子どもの意思ではないのに、鼻の管に食事を流すのは失礼だ。母の手でも食べなくなった時が、命が終わる時であり、それで母子ともに十分幸せなのだ」というもので、鼻腔栄養の管につなされた子どもの姿を目にすると、ひとり無念がっていた。

兄は障害児を運動させるためにいつも身体を鍛えていた。毎朝ジョギングし、通勤は自転車で自宅から病院まで30分ほどをかけて通っていた。

2006（平成18）年10月19日朝、

長学学
院大
名譽
古屋第二赤十字病院
愛知医療学院短期大学

石川 清 8



すべてを終えて天に召された兄。享年69歳

いつも通りに自転車で病院へ向かう途中、心肺停止となり、自転車ごと道路わきに倒れた。

通りかかった見知らぬ看護師さんた

障害児母子ら600人に見送られて

ちによって心肺蘇生を受け、救急病院へ搬送された。不整脈による心停止で、心拍は再開したものの高度の脳障害が残り、自分自身が植物状態の「重症心

思われる。しかし、兄の場合はそうではなく、生涯にわたって出会った多くの障害児母子や友人が連日のように見舞いに訪れ、元気な頃の兄の話や兄に世話になった話を語った。家族はまったく知らなかった世界を知ることができ、あつと言つ間の1年であったようだ。

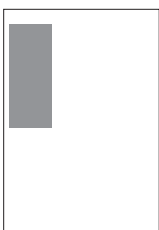
身障害者」になってしまった。その後、主治医から鼻腔栄養の話があったが、兄の信念を知っていた家族はこれを希望せず、点滴のみの治療を受けることになった。

2007（平成19）年11月1日、兄は享年69歳で天に召された。通い入れた教会で行われた葬儀には、600人にも及ぶ障害児母子や友人が訪れ、別れを惜しんだ。「障害児に仕えることが僕の伝道だ」という兄の言葉がその通りになった。

その時には、おそらく長くて数カ月が限度と思っていたが、元来健康であった兄はその後1年以上も生存した。亡くなった時には、体重は半分くらいになっていた。

生前は辞退していた叙勲だが、死後叙勲として正四位瑞宝中綬章をいただいた。兄は今でも、私のもっとも尊敬している人のひとりだ。

1年以上にわたる看病生活は、家族にとつてさぞかし大変であつたらうと



自分勝手に無責任

工学部から医学部への転進を決意した私は、再度、医学部を受験するため、大学院1年の夏休み過ぎから就職活動をやめて、受験勉強をすることになった。

大学に入ってから、自分で生計を立てるために家庭教師のアルバイトを続けており、多い時には3人の高校生を教えていた。このアルバイトがそのまま自分自身の受験勉強にもなっていたので、大学受験はそれほど苦痛ではなかった。

私は希望通りに合格することができ、1971（昭和46）年4月、名古屋大学医学部の1年生になった。この時、同じように学士入学した人は私を含めて5人いた。

名古屋第二赤十字病院名誉院長
石川清 9
名古屋第二赤十字病院名誉院長
知医療学院短期大学学長

石川 清 9



フランス語夏季留学に向かう飛行機の中で

人生で一番「嫌な奴」だった頃

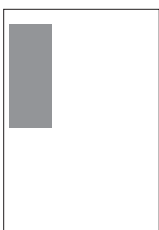
医学部へ入って最初の2年間の私は、人生の中で最も「嫌な奴」だった。医学部へ入学するのは難関中の難関と当時、大阪大学医学部の不正入試が言われていた。

大きな社会問題となるなど、国立大学に入った。と言うのも、取得しなければならぬ単位は医学部よりも工学部のほうが多く、すでに医学部の学生よりも多い単位を取得していたからだ。

その医学部へ入学できたことで、周りからチャホヤされたこともあり、私はすっかり思い上がってしまい、傲慢で、ラグビー部の顧問でもあったために振る舞っていた。今から思い起こせば恥ずかしい限りで、他の人から見れば、「自分勝手」「無責任」という言葉が当てはまる本当に許せない存在だったと思う。まさに自分の人生の中で、一番「嫌な奴」になっていたのだ。

そこで、傲慢だった私は医学部長に、「医学部での教養課程の単位取得を免除してもらえないか」と手紙で上申しました。当時の医学部長は高木健太郎先生で、ラグビー部の顧問でもあったために私の身のほどをわきまえぬ訴えに耳を傾け、工学部での単位を認めてもらうことができました。

その時の高木先生の考えは、「その分、ほかの学生の模範となるような時間を有意義に使うように」というものだった。しかし、その頃の私は、先生の気持ちを理解しようとはせず、ラグビーと同様に教養課程があり、私はこの授業を受けなければならないのが不服だとしてしまった。



学生結婚

ラグビーとアルバイトに明け暮れていた教養課程の2年間で、熱心に打ち込んだことがひとつだけあった。フランス語の勉強だった。

教養課程の単位の取得を免除されたものの、2年間はほかに勉強することがなく、自由な時間がたくさんあった。そんな中、ひとつくらいはものにしたいとの思いから選んだのがフランス語だ。フランス語の授業で受講できる授業はすべて受講した。

そのフランス語を短期間で効率的に修得するために、2年生の夏休みにはフランスへ留学し、語学学校の夏期講座を受講した。その結果、会話もかなり自由にできるようになり、英語よりもフランス語のほうが得意になった。

名古屋第二赤十字病院名誉院長
石川清 10
愛知医療学院短期大学学長

石川 清 10



南山教会のシュールベルト神父の仲人で結婚式

せつかく学んだフランス語を忘れな 化協会が主催しているフランス語教室
いたために、医学部の専門課程へ進んで に通うことにした。
からも勉強を続けることにし、日仏文 そこで私の生涯にとって大切な出会

フランス語教室での再会

いがあった。妻の暢子との出会い
である。

暢子とは以前、工学部の先輩の
卒業パーティーで一緒になったこ
とがあったが、その後は会うこと
もなく、数年ぶりにフランス語教
室で再会した。

2年ほどの交際を経て、医学部
5年生の時に結婚することになっ
た。学生結婚に踏み切ったのは、
お互いすでに27、28歳という結婚
適齢期に差し掛かっていたから
だ。

学生の身であり、あまりお金をかけ
ない結婚式を計画した。仲人は、暢子
のフランス語の先生である南山教会の
シュールベルト神父にお願いし、式は南
山教会で行った。新婚旅行は車で南紀
旅行という質素なものだった。

結婚はしたもの、医学部の5、6
年生は実習や国家試験があり、1、2
年生の時のようにアルバイトをする時
間的なゆとりはなかった。そんな新婚
生活の家計を支えてくれたのは暢子だ
った。暢子の実家は呉服屋で、家の手
伝いをして無収入の私に代わって生活
費を稼いでくれた。

そして、6年生の国家試験の受験勉
強の真最中に生まれたのが長男の清猛
だった。国家試験の勉強をしながら、
生まれてくる子どもの名前を一生懸命
考えていた。

